

ペテロの手紙第二3章10-18節 「主に見える努力」

1A 万物の崩れ落ちる日 10-13

1B 聖なる敬虔な生き方 10-11

2B 義の宿る新天新地 12-13

2A 堅実に生きる 14-18

1B 平安のうちの出会い 14-16

2B 恵みと知識の成長 17-18

本文

私たちの学びは、ついにペテロの手紙の最後に来ました。ペテロの第一の手紙から見ていき、第二の手紙を続けて読みました。今回は、ペテロがこの手紙を手にしてしている聖徒たちに、純真な心を奮い立たせてほしいとお願いしているところから始まりました。それは、イエス様が終わりの日に戻って来られるという希望です。私たちの周りには、数多くの誘惑があります。そのことによって、自分たちが肉欲の中に陥ったり、何かにつまずいてイエス様から距離が出て来てしまったり、心がどこか違うところにさまよってしまう、肉の弱さを持っていますね。絶えず、純真な心を保っている必要があります。それは、貴方が神に愛されており、選ばれて、イエス様の尊い血潮を降り注いでいただいたという事実です。その血によって、貴方の罪が洗い清められ、御霊が与えられて、神の子どもにさせていただいているということです。もっぱら神の恵みによって、神の国を受け継ぐようにしてくださいました。

ところが、躓きの多いこの世の中なのですが、その躓きを躓きだとしなない、「そのままのあなたで良いのだよ」という偽の教えが教会の中に入っているというのが、ペテロが第二の手紙で取り扱っている内容です。そして、イエス様が再臨される時は、自分のしていることの全てを公正に裁かれるのですが、そういったものは起こらない、あるいは、暗黙のうちに無視するように仕向けていくのが偽りの教えです。もし、私たちがこれまで変わらずに生きることができれば、自分のしていることが将来、何の影響もなく、自分のしていることに報いがないのであれば、今、自分のしていることを正す必要もなく、自分の心の赴くままに生きればよいこととなります。そこで、主の来臨などないとあざける教えが、教会の中にも入って来るといことです。「世の中、昔から何も変わっていないではないか。」と言っています。

そこでペテロは、「ノアの時代に一度、水の洪水があった。そこでは、神が前もってそのようにすると語られた。同じように、火によって滅ぼす日を神は御言葉によって保っているのだ。」と答えました。確かに、これから神の裁きは降るのです。けれども、何か遅いように見えるのはなぜだろう？という疑問に答えてくれています。一つは、神にとっては千年を一日のように考え、一日を千

年のように考えておられるということです。私たちが、永遠の視野で神に希望を置く必要がありますね。たとえ十年、二十年が経っても、それでも主が今日、戻って来られるかもしれないという期待をもって日々を生きるのです。

もう一つが、「神が、悔い改めるのを待って、忍耐しておられる」ということです。「主は、ある人たちが遅れていると思っているように、約束したことを遅らせているのではなく、あなたがたに対して忍耐しておられるのです。だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。(3:9)」ここまでが、前回、学んだことでした。私たちは、マタイによる福音書から、福音とは何なのか？について読んでいます。天の御国が近づいているから、「悔い改めなさい」というものでした。バプテスマのヨハネが説き、イエス様もこの言葉をもって宣教を開始されました。そして、山上の垂訓が「心の貧しい者」あるいは「霊の乞食は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。」という言葉から始まります。そしてイエス様が甦られて、ペテロが話したのは同じでした。「ですから、悔い改めて神に立ち返りなさい。そうすれば、あなたがたの罪はめぐい去られます。そうして主の御前から回復の時が来て、あなたがたのためにあらかじめキリストして定められていたイエスを、主は遣わしてください。(使徒 3:9-20)」ペテロは、バプテスマのヨハネが説き、イエス様ご自身が説かれた神の国の到来を語り、さらにそのために悔い改めを語りました。決して、彼が新しい考えを話したのではなく、むしろ、これこそが預言者たちが従来から語っていたことであり、主ご自身が確認されたことだったのです。

私は、「あなたがたに対して忍耐しておられるのです。だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」というペテロの微妙な表現に心が留まりました。全ての人が悔い改めていることを望んでおられると言いながら、不敬虔な者たちに忍耐していると書かないで、「あなたがたに対して忍耐している」と書いていることです。私たちは悔い改めたのだから、もう悔い改める必要はなく、不信者が悔い改めればよいのだということではなかったのです。むしろ、人々が悔い改めることを他人事のようにするのではなく、自分たちもその悔い改めに加わるべきだということを話しているのかもしれない。つまり、ダニエルが自分の民のために、まるで自分自身が罪を犯したかのように、神の前で悔い改めの祈りを捧げました。また、私たちがこのように積極的に祈らず、何の行動にも移していないことに対して、主が忍耐しておられると言えるかもしれません。神がすべての人々を悔い改めることを願っておられるのに、思いを一つにしないで自分たちは救われるのだから大丈夫だと、何もしないことに安住していることに対して、目を覚ましてほしいと願いつつ忍耐しておられるのかもしれない。そこで 10 節からの話が始まります。

1A 万物の崩れ落ちる日 10-13

1B 聖なる敬虔な生き方 10-11

10 しかし、主の日は、盗人のようにやって来ます。その日、天は大きな響きをたてて消え去り、天の万象は焼けて崩れ去り、地と地にある働きはなくなってしまいます。

「主の日」というのは、預言者たちが数多く語った、「神の怒りが地上に下る日」、そして全てのものを建て直す時のことを指しています。例えば、ゼパニヤが預言しました。「主の大いなる日は近い。それは近く、すぐにも来る。主の日に声がある。勇士の悲痛な叫び声がある。その日は激しい怒りの日、苦難と苦悩の日、荒廃と滅亡の日、闇と暗黒の日、雲と暗闇の日・・(1:14-15)」イエス様が、オリーブの山で弟子たちに終わりの日について教えられた、「大きな患難」の時であります。「そのときには、世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決してないような、大きな苦難があるからです。(24:21)」そして、これがダニエルの預言によって知らされていることをイエス様がオリーブ山で語られましたが、ダニエル書には、回復までに七十週が定められていて、最後の七十週目、その七年間が荒らす忌むべき者が堅い契約を結ばせている時であると説明しています(9:27)。ヨハネによる黙示録の預言では、6章からそれらの災いが地上に下っています。

この日について、イエス様は、盗人のように来るから用心していなさいと予め警告しておられました。用意のできていない者たちには、突如として襲って来る滅びです。使徒パウロがこう語っています。「主の日は、盗人が夜やってくるように来ることを、あなたがた自身がよく知っているからです。人々が、『平和だ、安全だ』と言っているとき、妊婦に産みの苦しみが臨むように、突然の破滅が彼らを襲います。(1テサロニケ 5:2-3)」ですから、私たちが「自分はイエス様を信じて救われたのだから、何をやってもよい」と安住してはいけないことが分かります。主人が外に出て行って、しもべに家のことを任せていたら、きちんと仕えているか、世の思い煩いや躓きによって怠けて、自分のしたいことをやっているかの違いが出てきます。主人が帰って来る時に、忠実に仕えていれば主人が喜ぶますが、酒を飲んだりして、下僕を打ちたたいているようであれば罰を受けます。主が来られるのは、そのような者たちには突如とした、盗人のようなものになるのです。

そして主の日は、「天は大きな響きをたてて消え去り、天の万象は焼けて崩れ去り、地と地にある働きはなくなつて」と言っているのです。主の日の特徴は、このように今の天と地が揺るぎ、そして崩れ去っていつてしまうことです。イザヤが預言しました、「34:4 天の万象は朽ち果て、天は巻き物のように巻かれる。その万象は、枯れ落ちる。ぶどうの木から葉が枯れ落ちるように。いちじくの木から葉が枯れ落ちるように。」イエス様も語られました、「マタイ 24:29 そうした苦難の日々の後、ただちに太陽は暗くなり、月は光を放たなくなり、星は天から落ち、天のもろもろの力は揺り動かされます。」ペテロが、「この天と地は、創造の時から変わっていないではないか。」と嘲ている者たちに対する回答です。確かに、預言者たちは、天が崩れ去り、地上にある働きがなくなることを教えているのです。

11 このように、これらすべてのものが崩れ去るのだとすれば、あなたがたは、どれほど聖なる敬虔な生き方をしなければならないことでしょう。

主の日について思う時、私たちはこのことを真剣に考えないといけません。「聖なる」生き方とは、

聖め別たれた生き方、この世にある罪や汚れから離れた生き方ですね。そして「敬虔な生き方」とは、神に似せた、キリストに似た生き方と言えます。この方の御心に沿ったこと以外は、みな崩れ去ってしまうのですから、なおさらのことこのような生き方に励まなければいけないということです。

使徒ヨハネも、「世と世の欲は過ぎ去ります。(1ヨハネ 2:17)」と言いました。すぐに、私たちは世についての思い煩いがあります。しかし、今、自分のしがみついているものは、どんなものであれ、過ぎ去ってしまうのです。それらのものに、私たちがどれだけ気を使っていることでしょうか？もちろん、私たちは神の栄光のために、御国のために、不正の富でさえ忠実になりなさいというイエス様の命令があるように、よく管理するものでなければいけません。しかし、主を第一にするのではなく、第二、第三にして、その他の事柄を優先させるのであれば、これらのものは過ぎ去ってしまうのです。自分の大切にしている物は過ぎ去ります。自分の大切にしている人でさえも、過ぎ去ります。パウロは、持っている者は持っていないようにしていなさいと勧めました(1コリント 7:29-30)。

2B 義の宿る新天新地 12-13

12 そのようにして、神の日の来るのを待ち望み、到来を早めなければなりません。その日の到来によって、天は燃え崩れ、天の万象は焼け溶けてしまいます。

これは一体、何のことなのでしょう？ 11 節で、聖なる敬虔な生き方をしなければいけないとペテロは言っているので、このようなことをして、神の日の来るのを待ち望み、到来を早めることになるのですが、けれども、イエス様は、「父がご自分の権威をもって定めておられることです。(使徒 1:7)」と言われました。父なる神は既に、主の到来の日を定めておられるのです。けれども、早めなければいけないというのは、私たちの方で、その日を迎えることができるように、しっかり備えなければいけないということでしょう。私たちは、自分の都合の良いように解釈してしまいがちです。主が時を定めておられるから、自分たちが何を行っても行なわなくても、じたばたしても運命のように定められているのだから、ただ黙って、何もしないで待っていようと考えてしまいます。

けれども、イエス様は、「御国が来ますように。」と祈りなさいと命じられました。御国が来ますようにと祈りながら待ち望む中で、早く来てくださいという期待なくして祈ることができるのでしょうか？できませんね。今、読んだように、私たちがしっかりと目を覚まして用意している、聖なる敬虔な生き方に徹していることによって、主人のお帰りを待つことができます。さらに、神の救いのご計画には、福音が宣べ伝えられて、それから御国が来るというものがあります。「御国のこの福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来ます。(マタイ 24:14)」そしてイエス様は、一ミナの話をした時に、商売をしなさいと言われたのです。ですから、神の日を待ち望むというのは、何もしないでぼおっとしているのではなく、むしろせつせと、祈りに励み、主の前で聖く生きることに努め、そして福音を伝えることにも熱心であることが含まれているのです。そういった意味で、「到来を早めなければなりません」とペテロはここで言っているのでしょうか。

ただ、気を付けなければいけないのは、「私たちが世界中に福音を伝えなければ、イエス様は戻って来ることはできない」と、私たちのしていることによって主の到来の日を変えることができるかのような、再臨はすべて私たちの働きによるというような考えも、また極端です。主は、私たちの助けなしにご自分の働きを貫徹することがおできになります。黙示録 14 章には、すべての民、国に永遠の福音を伝えているのは御使いなのです。

そして、「その日の到来によって、天は燃え崩れ、天の万象は焼け溶けてしまいます。」と言っていますが、次に続く言葉を読んで考えてみたいと思います。

13 しかし私たちは、神の約束にしたがって、義の住む新しい天と新しい地を待ち望んでいます。

新しい天と新しい地です。イザヤ 65 章 17 節、66 章 22 節で啓示されている、最後の最後の姿です。ヨハネも黙示録の中で啓示を受けていますが、千年間の地上での統治の後で、こう書いてあります。「地と天はその御前から逃げ去り、跡形もなくなった。(20:11)」とあります。そして最後の審判があり、それから新しい天と新しい地の幻があります。ですから、イエス様が来られて地上に千年間の統治、千年王国があった後に、それから 12 節にある、天が燃え崩れ、万象が焼け溶けてしまう、つまり原子の単位さえもが崩れてしまうようになり、それで全く新しい天と地が造られる、創造されるということです。

そして、ペテロはそこが「義の住む」ところであることを強調しています。新しい天と新しい地においては、黙示録 21 章においては、死がなくなり、苦しみや嘆きが過ぎ去る、すべてが新しくされるということが強調されていますが、正義が宿るところでもあります。罪や不義を行なっている者たちは、そこにあずかることはできない、彼らの分け前は火の池であるということも書かれています。ですから、新天新地を待ち望むことのできる人は、義に飢え渴いている人です。イエス様が、義に飢え渴いている者は幸いです、その人たちは満たされるからと言われましたが、まさにその通りで、悪や罪を憎み、神の義に飢え渴いているからこそ、期待して、待ち望むことができます。

2A 堅実に生きる 14-18

このようにして、主の日が来て、新天新地が来ることを鑑みて、ペテロは信者たちに勧めを与えます。

1B 平安のうちの出会い 14-16

14 そういうわけで、愛する人たち。このようなことを待ち望んでいるあなたがたですから、しみも傷もない者として、平安をもって御前に出られるように、励みなさい。

ペテロは、何度となくこの呼びかけをしています、「愛する人たち」です。そして、彼らが、「このよ

うなことを待ち望んでいる」ということも知っていました。しかしながら、それでもペテロは励まされたのです。これらのことを思い起こさせて、純真な心を奮い立たせたかったのです。

そして、「しみも傷もない者として」と言っています。これは、まずイエス様ご自身に対して使った言葉です。「傷もなく汚れもない子羊のようなキリストの、尊い血によったのです。(1ペテロ 1:19)」これは、いけにえに使われている表現であり、生まれつきの欠陥は「しみ」と呼ばれます。そして、生後に加えられた傷は「傷」と呼びます。主に捧げるいけにえとして、しみや傷があってはなりません。しかし、イエス様は生まれつきの罪も持っておられなかったし、また罪を犯されませんでした。罪の性質もなかったし、罪の行為も行なわなかったのです。しかし私たちは生まれながらにして罪人で、罪を犯した者です。しかし、キリストのその尊い血によって私たちは贖い出されました。キリストがおられることによって、ここの勧めを行なうことができますね。

パウロも何度となく、この勧めを行ないました。例えば、ピリピの人たちに対して、「こうしてあなたがたが、キリストの日に備えて、純真で非難されるところのない者となり、イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされて、神の栄光と誉れが現されますように。(1:10-11)」テサロニケの人たちにもそう話しました。「平和の神ご自身が、あなたがたを完全に聖なるものとしてくださいますように。あなたがたの霊、またしい、からだのすべてが、私たちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのないものとして保たれていますように。あなたがたを召された方は真実ですから、そのようにしてくださいます。(1テサロニケ 5:23-24)」

これらのことは、使徒の祈りですから、ややもするとそうではないということがあり得ます。コリント第一 3 章 10 節以降に、私たちの働きが、イエス様が火とともに現れて、その真価が試されることが書かれています。そして、残っているものにしたがって報いを受けますが、その働きが焼けてしまっても、「その人自身は火の中をくぐるようにして助かります(15 節)」とあります。これでは、ペテロがここで話しているような、「平安をもって御前に出られる」ということではないですね。平安を持って主が来られる時に出て行けるというのは、日頃から、主が間もなく来られることをおもって、キリストの中に留まっていることによって可能であります。使徒ヨハネも言いました、「1ヨハネ 3:19-21 そうすることによって、私たちは、自分が真理に属していることを知り、神の御前に心安らでいられるのです。たとえ自分の心が責めたとしても、安らかでいられます。神は私たちの心よりも大きな方であり、すべてをご存じだからです。愛する者たち。自分の心が責めないなら、私たちは神の御前に確信を持つことができます。」御心を行なっているのであれば、主にお会いする時、心安らかにすることができます。たとえ、責められることがあっても主はもっと大きな方です、救われます。けれども、責めがなければ、御前に大胆に平安の内に出て行くことができるのです。

15 また、私たちの主の忍耐は救いであると考えなさい。愛する、私たちの兄弟パウロも、自分に与えられた知恵にしたがって、あなたがたに書き送ったとおりです。

「主の忍耐」とは、先ほどペテロが話した、主が忍耐されて、すべての人が悔い改めに導かれるようにしている、ということです。主が忍耐していただき、人々が悔い改めるのを待っていてくださっています。そしてペテロは、「愛する、私たちの兄弟パウロ」と言及しています。ペテロとパウロの関係は、ペテロがユダヤ人への使徒であり、パウロが異邦人への使徒でした。ですから、異なる人々への働きかけをしているのですが、ガラテヤ書を見ますと、互いに交わりがあり一致していました。違うことを教えているように見えて、全然、同じことを信じていました。

「自分に与えられた知恵にしたがって、あなたがたに書き送ったとおりです」と言っていますが、ペテロが第一、また第二の手紙を書いたのは、おそらくパウロが二回目の公判を受け、ネロによって処刑されるために捕えられた後とも言われています。ガラテヤ地上に住む人々でした。ですから、パウロの手紙にも良く触れていた事でしょう。

16 その手紙でパウロは、ほかのすべての手紙でもしているように、このことについて語っていません。その手紙の中には理解しにくいところもあります。無知な、心の定まらない人たちは、聖書の他の箇所と同様、それらを曲解し、自分自身に滅びを招きます。

パウロの手紙は、パウロ自身が、曲解する者たちに対して警告しています。パウロは神の恵みと、信仰による義を強調したために、「罪が増し加わるところに、恵みがあふれる」という言葉を曲解して、罪の中にも許されると考える者たちがいました。パウロは、恵みではなく放縦を教えている、律法の完成ではなく律法の廃止を教えていると思い込んで、信仰を潰してしまっている人々がいたようです。パウロは罪の中に生きることなど、「絶対にありません」と言って、完全否定しています。ペテロも、そのような恵みを放縦に変えるような者たちがいることを指摘しています。私たちも、ややもすると、聖書のある箇所だけを強調して、その意味する所を誤解して受け取り、そして滅びを招いているということはあるのです。

2B 恵みと知識の成長 17-18

17 ですから、愛する人たち。あなたがたは前もって分かっているのですから、不道德な者たちの惑わしに誘い込まれて、自分自身の堅実さを失うなわないよう、よく気をつけなさい。

ペテロは、彼らは分かっていることは確信していましたが、けれどもそれでも、彼らを建て上げるべく繰り返しました。それが、第二の手紙の全体に描いていましたが、「不道德な者たちの惑わしに誘い込まれないようにします。そこで、大事なものは「自分自身の堅実さ」です。それが、ずっとペテロが手紙の中で強調したことです。第一の手紙にもそうですし、「堅くする、強くする」という言葉が続いていました(1ペテロ 5:10)。彼の好きな言葉は「努める」ということです。霊的なことについて、勤勉になるということです。不断の努力をすることです。そして、いつの間にか、「このままのあなたでいいのだよ。ただ、自分のしたいことをしていきなさい。」と言って、欲していることのすべて

をやらせる偽の教えに気を付けていなさいと、促しています。

18 私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。イエス・キリストに栄光が、今も永遠の日に至るまでもありますように。(アーメン。)

これが第二の手紙の要約と言ってもよいでしょう。まず、主は私たちの救い主であられます。私たちが罪から救い、世の滅びから救ってくださる方です。ですから、私たちは世から免れることができます。そして、そのために必要なのは「成長」です。そのために、1章では、「信仰には徳を、徳には知識を、知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には敬虔を、敬虔には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい。(5-7節)」とあるのです。

そして、何に成長するかといえば、初めに「イエス・キリストの恵み」に成長すること입니다。成長という言葉を聞くと、多くの方が自分の行ないについての成長を考えます。いいえ、自分が全く受けるに値しないのに、受けているイエス様からの愛について、その好意について成長します。恵みに満ちること、恵みに強められることが必要です。それから、「知識」です。その中で知識が増えます。イエス様を個人的に、人格的に知るようになります。イエスを知っているということが、すべての偽りの教えから守られるための防御です。そして、自分が成長することによって、イエス様ご自身に栄光が与えられます。今も栄光が与えられますし、永遠の日に至るまでの栄光をおささげすることができます。私たちの成長を、イエス様はそれだけご自分の栄光と関わらせて関心を持っておられるのです。